



Title	<翻訳> Д. ナツァグドルジ「インドの踊り子に捧ぐ」
Author(s)	Д., ナツァグドルジ; 織田, 幸彦
Citation	モンゴル研究. 2023, 32, p. 75-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102401
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《翻 訳》

インドの踊り子に捧ぐ

Д. ナツアグドルジ

(訳) 織田 幸彦

インドの宝石の衣装でその体を包み

その豊かで美しき胸肌は誰もの目を驚かせ

その目まぐるしく鋭いまなざしは誰もの愛を奪い

その優しく静かな心はうつつの世界を溶かす

インドの若き踊り子よ

どうか、一緒に居ておくれ

原題 Энэтхэгийн бүсгүй (Д.Нацагдорж) 1930年

.....

1930年の「帰国者」—

筆者の母方の祖父・古家新(1897-1977)は洋画家として小磯良平や竹中郁(詩人)等とともに1928年から1929年にかけて渡欧、仏・伊・蘭等に滞在しました。

当時祖父は31才、1926年から1929年にかけてドイツ留学中の詩人Д. ナツアグドルジは23才、洋行者として偶然、同じ時期に滞在していたことになります。

当時の欧州はアジア・オリエンタリズムが流行していたでしょうから、そういう趣向の店も多く、ひょっとして祖父も、場末の陰影に埋没して華麗なインド古典舞踊に夢見心地となったかもしれません。

「モンゴル研究」第4号に未収録の詩篇のうちД. ナツアグドルジ「インドの踊り子に捧ぐ」を見直して訳しました。最後の行は迷いましたが、Charles R. Bawden という人の訳文に "I wish I could meet you, young Indian dancing girl." とありましたのでこれに倣いました。

(おだ さちひこ)